のは好ましくないが、どうしても必要な場合には、水神様をお祀りした上で呼吸口として細い筒を残し、完全に埋めてしまうことは戒められた。このように自噴井を掘ることは、そこに水神様を招くことを表した。特に埋めることについて注意がはらわれたのは理由がある。井戸を掘ることは、新たに水の道筋を作る事を意味し、埋めてもその跡が残る。そのため埋めたつもりであっても、大雨の時に水が噴出したり、周囲に水が滲み続ける、あるいは土地が陥没するなどの危険性がある。これらは、呼吸をふさがれた水神様の怒りであるととらえられた。

以上のように自噴井には、人々に恵みをもたらす側面と、禍をもたらす側面があった。恵みとしては、輪中堤防内で比較的容易に安定した水が得られる点がある。禍としては、(1)冷水をもたらす、(2)内水氾濫をもたらす、(3)埋めた井戸は滲み水や陥没が起こりやすい、などである。(1)は調節が可能であるが、(2)(3)は、自噴井を使用する上で避けられない禍である。こうしたなかで井戸に水神様を祀るしきたりは、むやみに掘り、埋めることを戒め、ひとつの井戸に水神を祀りながら大切に使う姿勢となっている。それは間接的に井戸数の抑制につながり、結果として内水氾濫のリスクを減少させた。

宮崎県山間部における狩猟のしきたり

——西都市銀鏡の事例——

鈴木 良幸

西都市銀鏡の狩猟には伝統的なしきたりがあった。山に入る際や、仕留めたとき、解体するとき、分配するときなどに特定

の行為規範が定まっていた。狩は生死にかかわると同時に、集落の存続にもかかわる一大事であった。

現在ではしきたりの多くが行なわれていないため、本研究では先学の調査研究(千葉徳爾『狩猟伝承』風間書房、一九八六。山口保明『宮崎の狩猟』鈹脈社、二〇〇一。濱砂武昭『銀鏡神楽』弘文堂、二〇一二)と古老への聞き取りにより、狩におけるしきたりと危機とのかわりを分析した。その結果、狩猟活動にまつわる危機に対する基底的な態度として、狩の前の齋忌がおこなわれることが明らかになった。

しきたりをおとしてみると、狩猟には、動物をとらえることだけでなく、次のようなプロセスが含まれることがわかる。「齋忌—山の神祈願—狩り—獲物の魂送り—贄—役割に応じた分配—矢立て—共食」である。

このプロセスには、次の四つの点において集落の存続や生死にかかわる危機が存在する。①不猟。②誤射、暴発などの事故、および動物の反撃による落命の危険。③猪の魂がミサキ神(不慮の死を遂げたものなる)となり祟る危険。シシを千匹とると自分の猟犬に命を奪われるともいう。④獲物の略奪の危険。猪(大型動物)は小動物と異なり、肉が豊富であるため余剰による社会性をもつ。そのため略奪の危険がある。

これらの危機を避け、狩を清浄に保つために、つぎの三つのしきたりがあった。

(1) 人間を越えた力への畏敬を示すしきたり。①山の崩れる音や木の倒れる音、猪がたくさん集まっているようなざわめき、ホイホイと叫ぶ声を聞いたときにはすぐ山を下りる。これ

らはカリコボウズ、または山の神の仕業といわれ、危険の前兆である。②ヘンプ日(月に一度定められた禁猟日)には狩をかく禁じている。この日は鳥獣の天国の日といわれる。自然の秩序が尊ばれていることがわかる。③さかめぐり(干支により決まる禁猟の方向)の方角へ行き狩をしてはならない。生き物を隣れむ神がいるため獲物が無いという。命への畏敬があらわされている。

(2) 死や血に関する不浄を除くしきたり。喪の期間である黒不浄のとき(ヒガカリともいう)、先祖の夢を見たとき、朝にサル(この世を去る)の話をしたとき、家族の者が出産や月経で赤不浄のとき、は狩に行かない。

(3) 狩の成功の妨げとなる邪心を除くしきたり。狩に際して、仲間内でもめることや、出かけに妻と口論すること、を避ける。狩の協働に影響し、神ごととしておこなう狩の成功を妨げるからである。即ち、これは狩やしきたりのもつ聖性を冒瀆する不浄である。

以上のように、人力を越えた力への畏敬を基礎に、死、血、邪、しきたりに従わない穢れた行為を避ける齋忌がおこなわれていたことがわかる。岡田によれば、イミは、共同体のしきたりや宗教的秩序とおして、その根源にある神(神聖)へと近づく「齋(イミ)」と、不浄による神聖の冒瀆を避ける「忌(イム)」とをあわせ持つ概念である(岡田重精『齋忌の世界 その機構と変容』国書刊行会、一九八九、七六および四三二)。

狩猟活動にまつわる危機は、共同体全体にかかわる問題であった。そのため齋忌も共同体全体の規範となる。齋忌を基底的

な態度としたのである。自然の力に畏敬し、共同体持続の知恵(しきたり)を善とした。そしてそれらを穢すおこないを可能な限り除いたのだと考えられる。

真宗「地帯」の再考

——三重県津市における宗教民俗の諸相から——

亀崎 敦司

「真宗と民俗」をめぐる研究では、「真宗地帯に民俗行事は残りにくい」という研究がなされてきた。たしかに、真宗地帯に非真宗的要素が残りにくいという事実は見られるだろう。しかし、そこには研究者のまなざしが介在しており、「民俗か、真宗か」という線引きは研究者の恣意性に左右されてしまっているのではないだろうか。本発表では、そうした一連の「真宗と民俗」の研究を再考し、地区に残る真宗行事や非真宗行事がその地域でいかに伝えられているかをミクロな文脈にひきつけて考察していく。

真宗高田派は、三重県津市一身田に本山専修寺をおく真宗の一派である。長らく関東に拠点を置いていた高田派がこの地方へ教線を拡大したのは一五世紀後半からと言われているが、現在でも本山を中心にして高田派の門徒が住民の多数を占める村落が周辺に広がっている。調査地である津市河芸町北黒田もそのような地区であり、歴史的に高田派の強い影響をうけてきた村落である。北黒田では、教義の観点から見て①真宗的行事と②非真宗的行事が行われている。

まず、①では報恩講や棚経が挙げられる。このとき、行事を